

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black



60

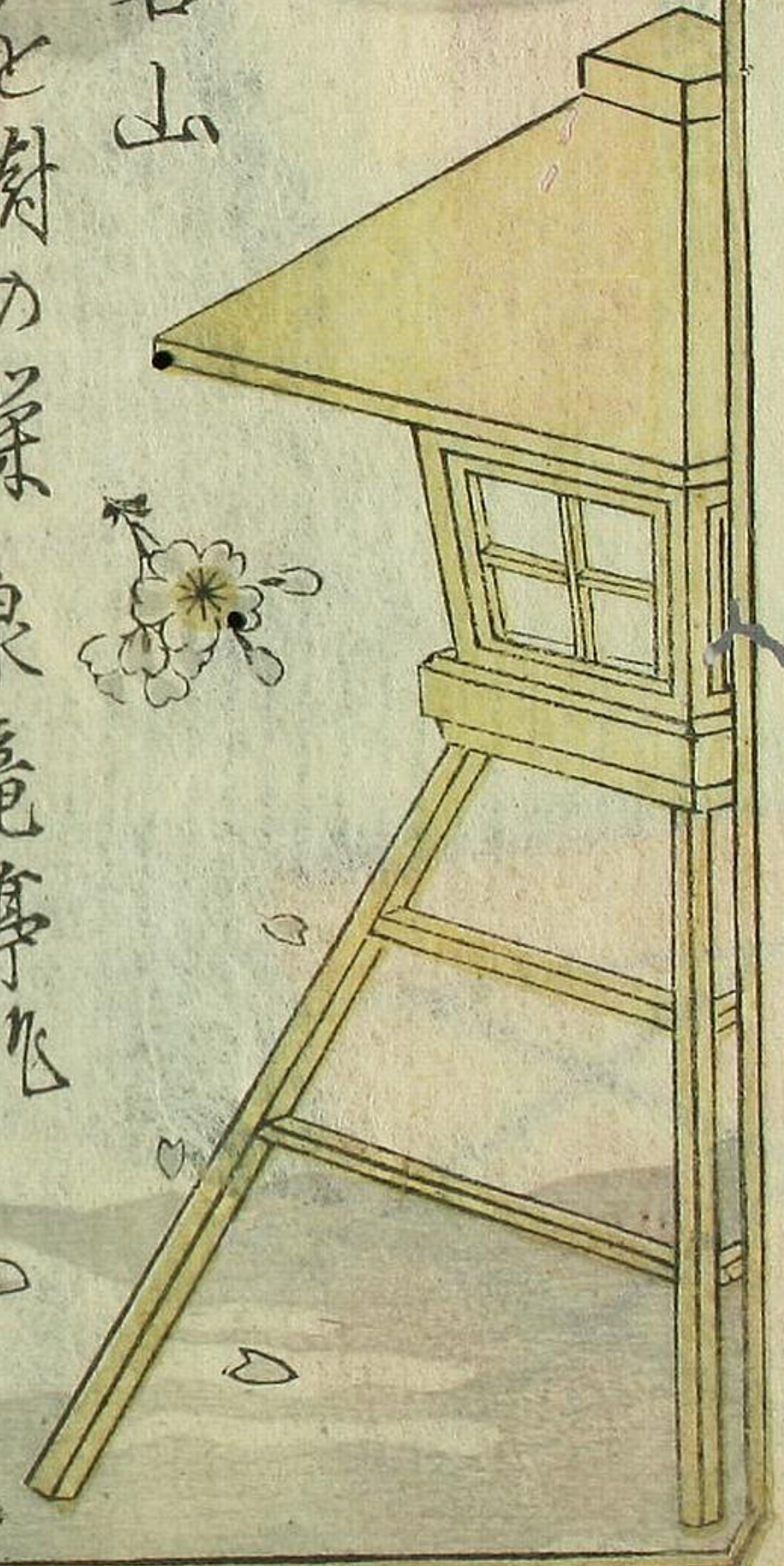
65

70

75

小倉山

樹の榮
泉
龜亭
作
房
繪
畫
昔
日
新
話
新
話
四
編
の
上
久
原



48-8183

明メイ 黨タク 嫌ゲン 疑ギ 漫マン 相アヒ 愆アヤ 幽ユウ 囚シウ 半ハン 歲サイ
只ツル 從シタ 天テン 縱タト 令ヒ 舉キヨ 世セイ 稱シヨウ 豪スガ 傑カウ 傑ケツ 報ホウ
國コク 寸スン 心シン 誰タレ 有アラン 憐レン

沖ウキ 津ツ 心シン 誰タレ 有アラン 憐レン

ぬ
水
結
衣
何
す
う
も
ら
ぬ

詩歌
青木信光



深川水場
萬和大人

栄喜岡本樓の
花柳



の
師
目
方
斯



吉樹弥太郎
あきやとらり
兼士の統領

三ノスロ



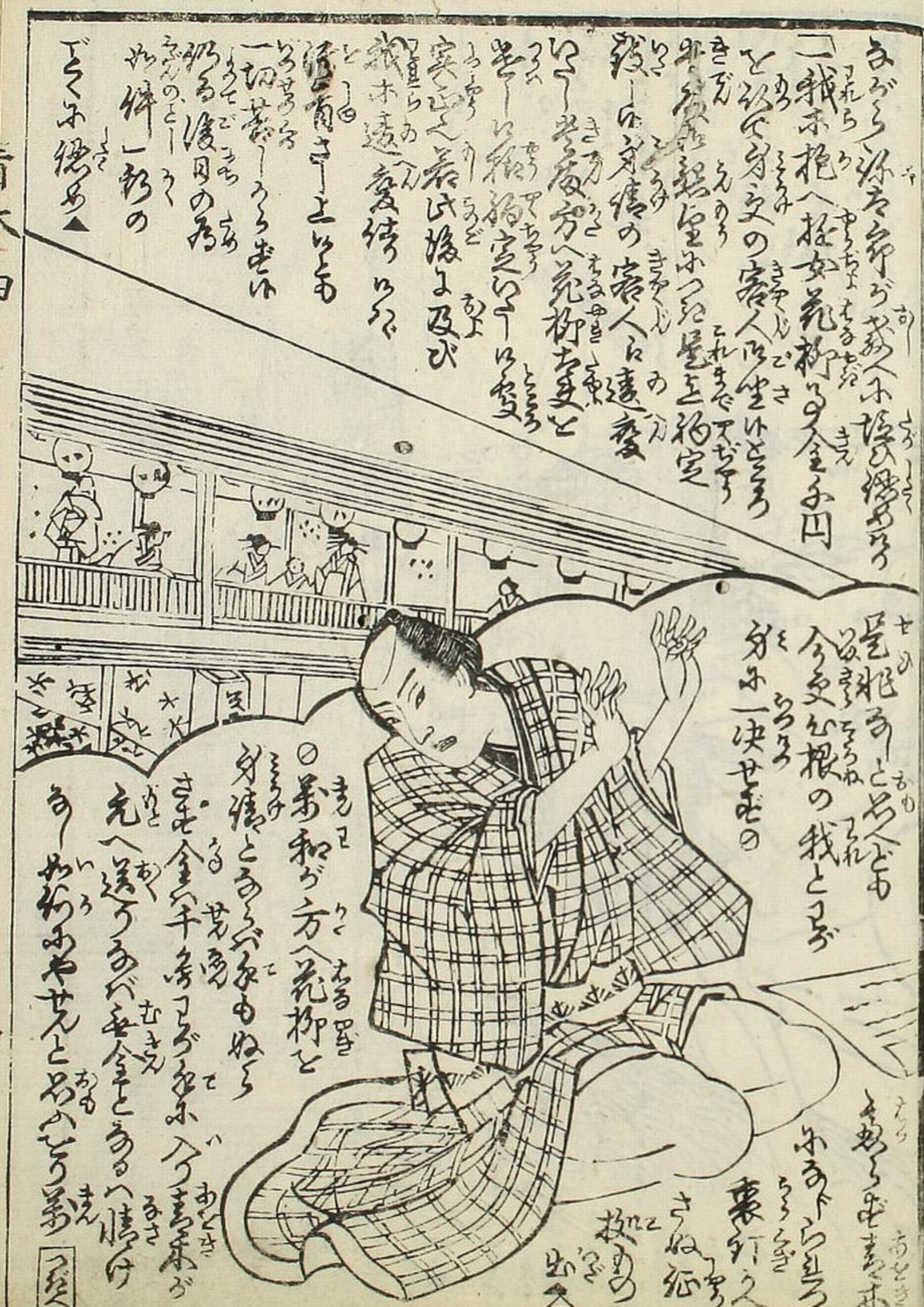
ねも豪華傑作はゆきをの目か田某らつ分のねはよ下花柳を文と色清
けんと景長岡本橋くいつらうまへ見く種々疾所と及び一が景長文
徳ういせ今千金をりて花柳を身けの客のゆえきとゆぞ身代もゆき
しと景長者のうえ送らんやと鼻のたまふまは技指さ其豪華傑作は
油ちと新と吐くあまは文大察の巻終りゆるくと帯よのふへと
あり親愛を花柳への長柄赤るが雲の巻りて初あまより父母よ
はる景長をあるあまのむ引されまはる連らまは女初りつめの金を
酒とゆらふ初あまきようは年月星夜と毎が林せよ今景長あまらよ
さまを換毛あるべきは限るを眼あま外款うらま一者ともと一乳
て天保よかろが報景長士のあまの息まくらしく自一其を勢ひおれと
まはらうる乳状とあまのゆるねと一寸腕れの問答よ若くさうと花柳と
親愛あまは親らよ及び老中も角も斗らあま一巻ららまはる花柳と
ねと客の肉候ゆりて身代のお候まありと今景長あまはあまはあま
遊らうとよも返答いゆるまはは景長のとくを帯指があまは景長と



つぎ 一人おれと
これおれも
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん

とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん

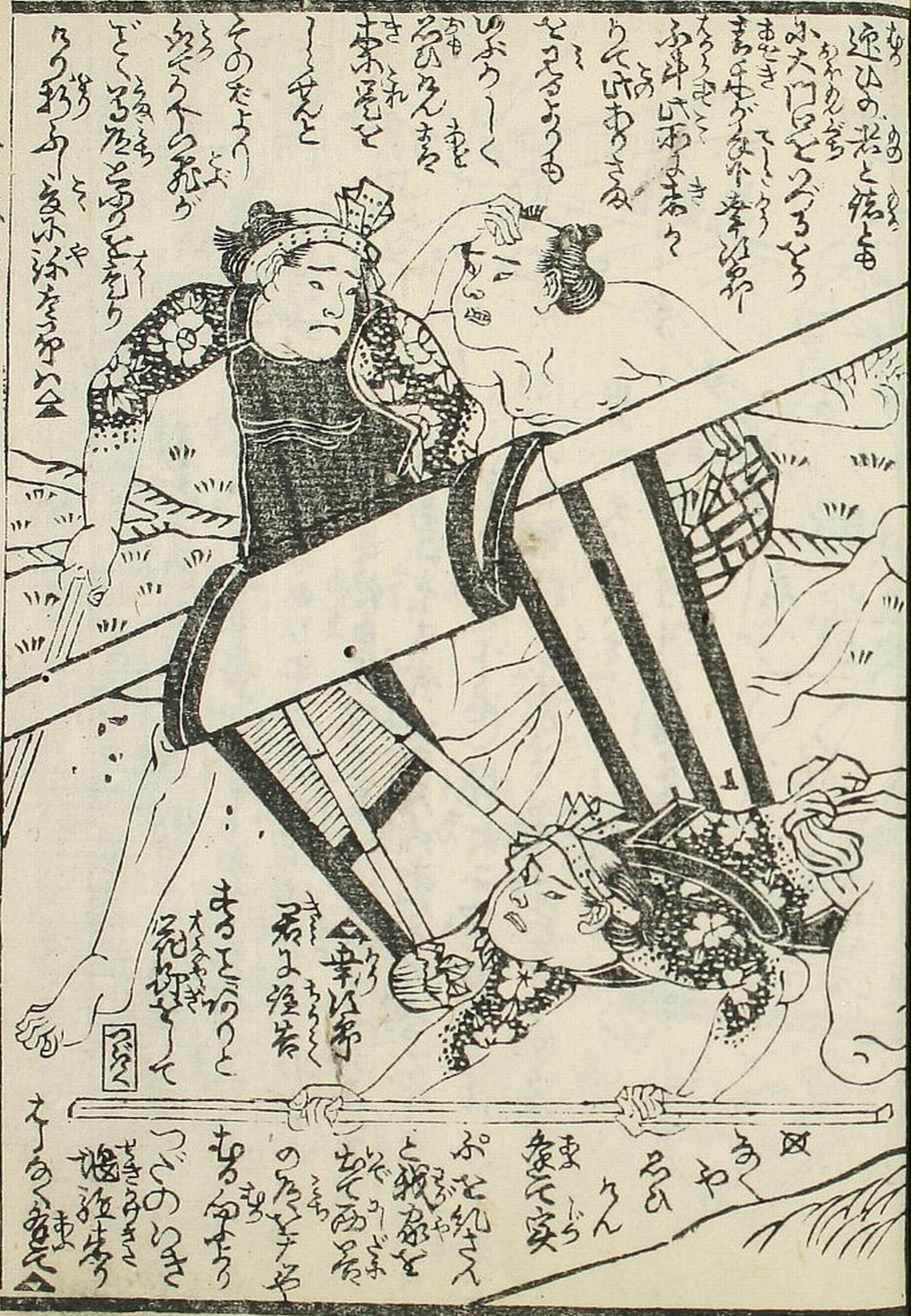
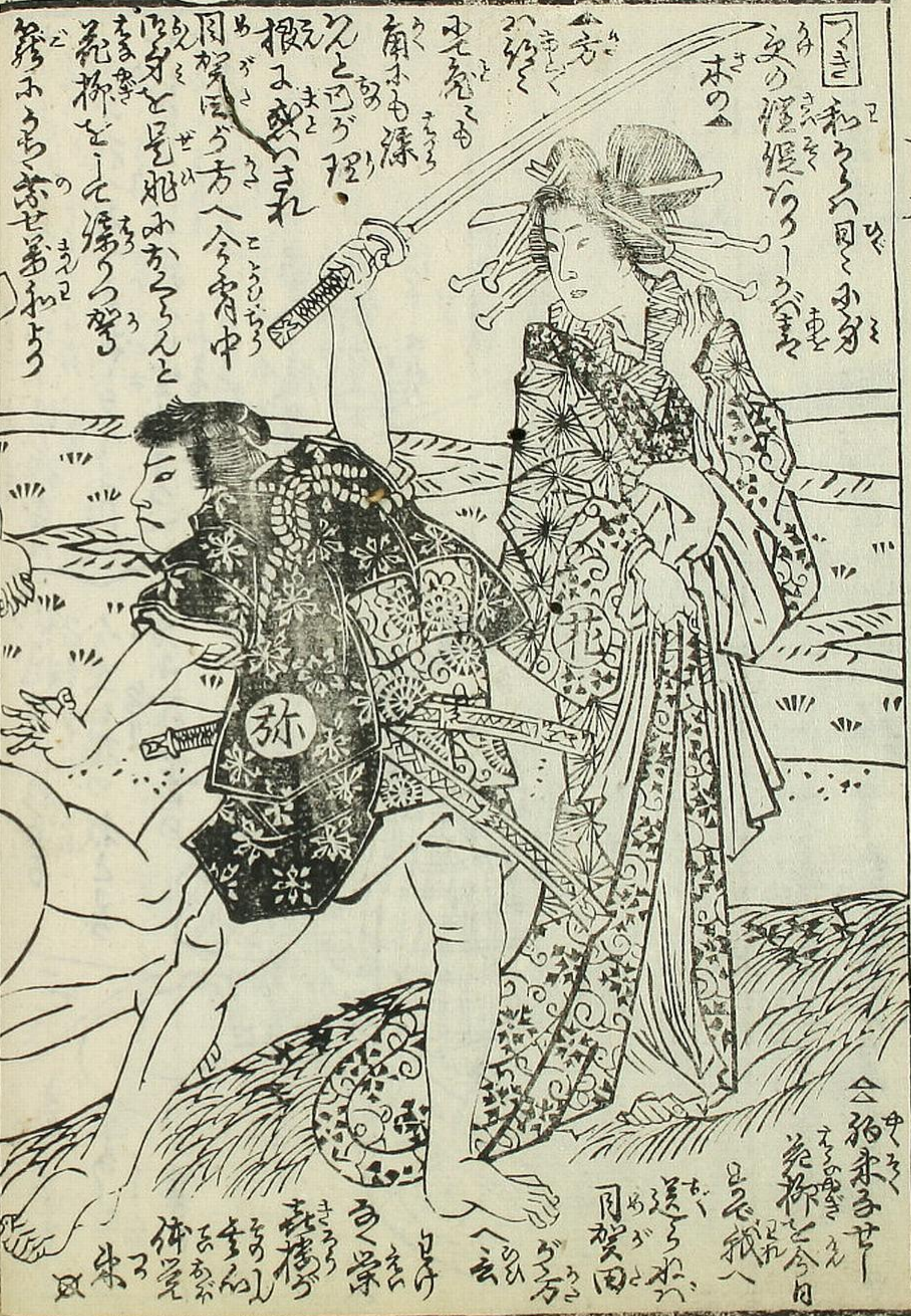
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん



とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん

とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん

とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん
とれげん



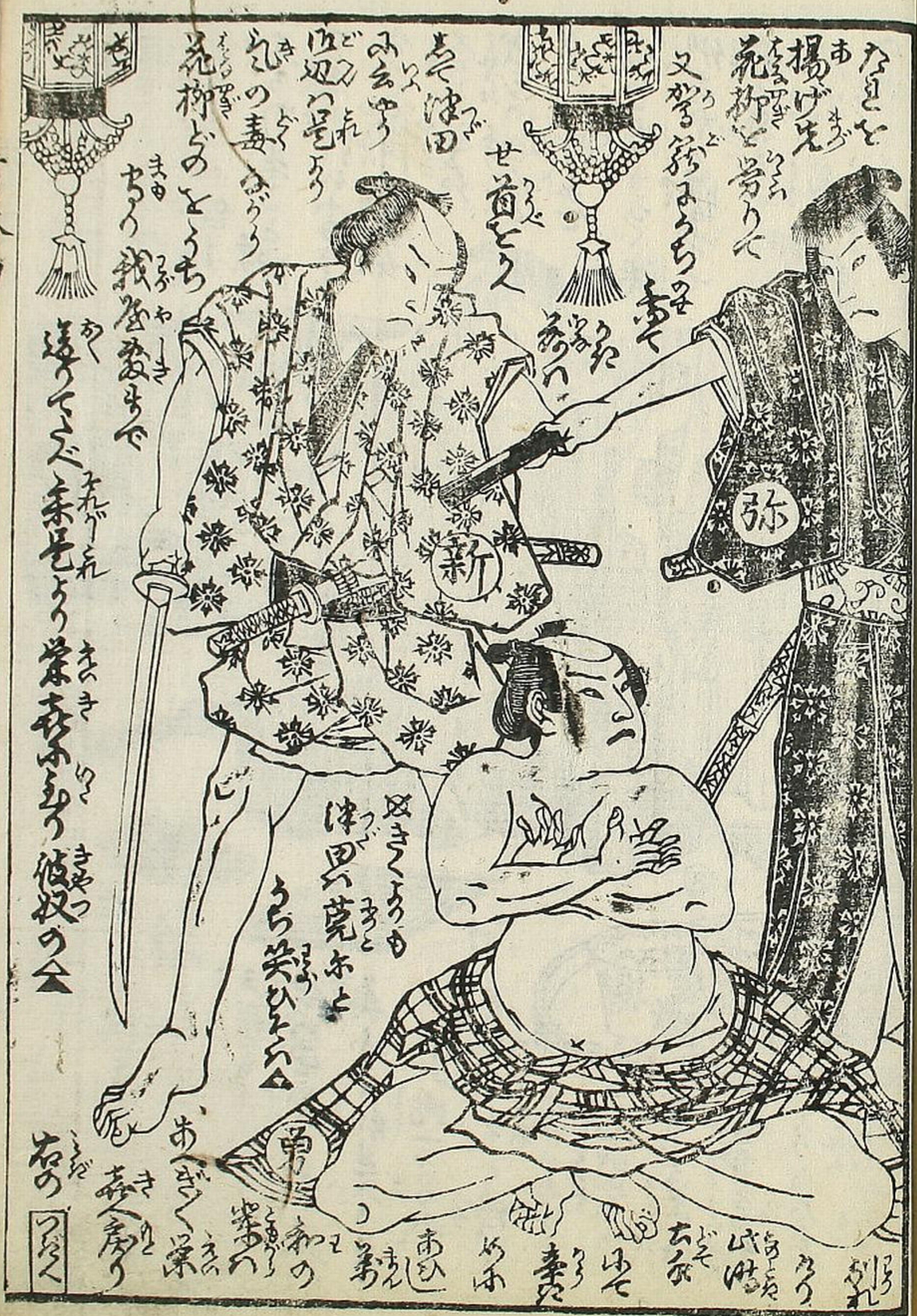


眼のつらみ大目には
 物忘れの我と孫半多和の
 傍に我は我と孫半多和の
 近きまね物多あつて奉
 長勇ふをる武士の
 日々の日本地よ未か
 幸祐天のまをりより
 伸て怒る孫の持たる

会せつこ
 人えがの
 多入投込まを泥小



眼のつらみ大目には
 物忘れの我と孫半多和の
 傍に我は我と孫半多和の
 近きまね物多あつて奉
 長勇ふをる武士の
 日々の日本地よ未か
 幸祐天のまをりより
 伸て怒る孫の持たる



顔赤と花
 儂のさくらぬふふ
 びあゝあふ條々
 本らあふるとさ
 て葉をのりあふさ
 りの家内の男女
 大さふあふた
 我茶あふんと
 一とあふあふ
 あふあふあふあふ
 例まああふあふあふ
 我と我あふ
 例あふあふあふ
 のあふあふあふ



絶水増さふあふあふあふ
 矢張あふあふあふあふ
 我あふあふあふあふ
 一とあふあふあふあふ
 梅あふあふあふあふ
 さんけあふあふあふあふ
 あふあふあふあふあふ
 是あふあふあふあふあふ
 一のあふあふあふあふ
 我あふあふあふあふあふ

めつあふあふあふあふ
 剥てあふあふあふあふ
 銘あふあふあふあふあふ
 派あふあふあふあふあふ
 神あふあふあふあふあふ
 今あふあふあふあふあふ
 花あふあふあふあふあふ
 強あふあふあふあふあふ
 松あふあふあふあふあふ
 吹あふあふあふあふあふ
 あふあふあふあふあふ
 まあふあふあふあふあふ
 向あふあふあふあふあふ
 時あふあふあふあふあふ
 次あふあふあふあふあふ



全あふあふあふあふあふ
 勇あふあふあふあふあふ
 恥あふあふあふあふあふ
 返あふあふあふあふあふ
 情あふあふあふあふあふ
 全あふあふあふあふあふ
 おあふあふあふあふあふ
 海あふあふあふあふあふ
 おあふあふあふあふあふ
 海あふあふあふあふあふ
 全あふあふあふあふあふ

伏一カ止む
 ねえねえ
 てはか
 原
 助
 迷
 忠



〇風の方で外小見
 〇あはれ
 〇あはれ
 〇あはれ

梅檀の林
 〇あはれ
 〇あはれ
 〇あはれ
 〇あはれ



〇あはれ
 〇あはれ
 〇あはれ
 〇あはれ

泉竜亭是正作
櫻齋房種画

下之卷



き 兄やふらふらや
 ねやあつたのほまれ
 公卿もあま
 ちのあま
 別
 是海のたふし
 ちのふも

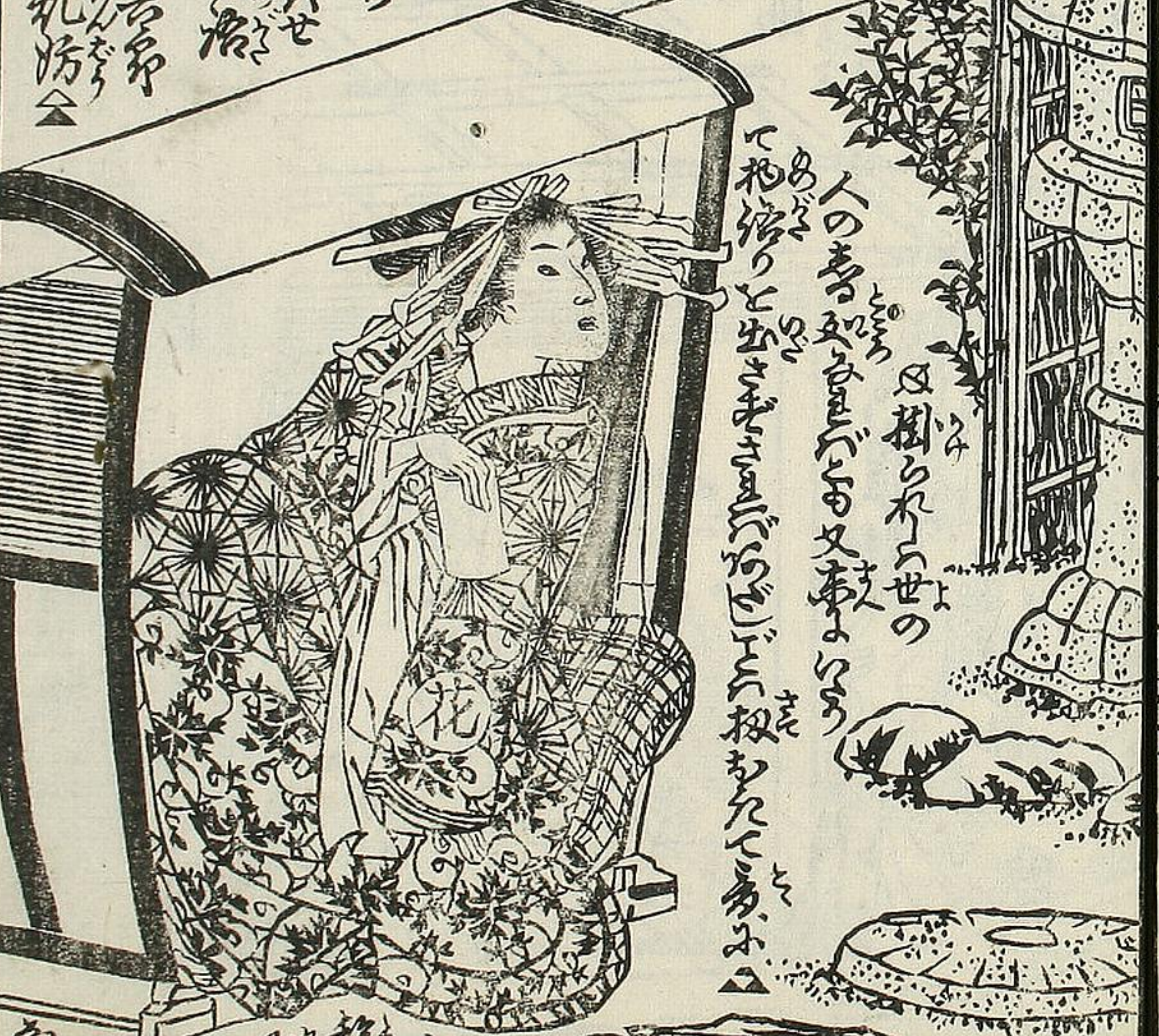


せ一 権よふらふら
 来の付まあふ何あま
 来あ

あつたのほまれ
 ちのふも
 別
 是海のたふし
 ちのふも



あつたのほまれ
 ちのふも
 別
 是海のたふし
 ちのふも



あつたのほまれ
 ちのふも
 別
 是海のたふし
 ちのふも



我々の暮しの如く長きものからいひし中
 振うとほつた今より下流の舟に宿まらるる君
 心合の單〜と云ふ事と縁のなかりたる
 ねとほつらん君の日おしんて本末の君より
 舟と宿はほつたのふらち舟の君と宿のつらさ
 宿の君はもたれとほつた舟と宿のつらさ
 舟の君はもたれとほつた舟と宿のつらさ

舟に宿のつらさ
 舟に宿のつらさ

去年の今更
 舟に宿のつらさ
 舟に宿のつらさ
 舟に宿のつらさ
 舟に宿のつらさ



舟に宿のつらさ
 舟に宿のつらさ
 舟に宿のつらさ

舟に宿のつらさ

舟に宿のつらさ

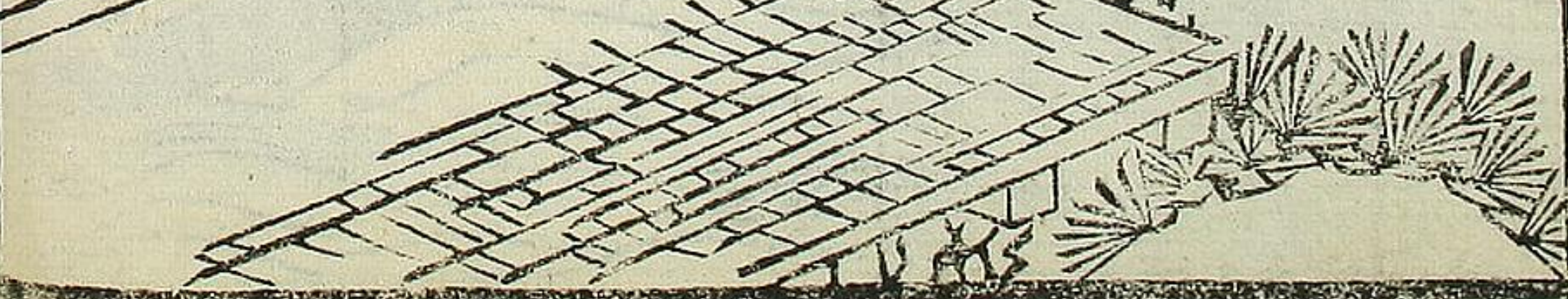


くきのわび
 被褥考
 へんやう
 けの帯
 けの帯
 けの帯

いりて
 ままの
 けの帯
 けの帯

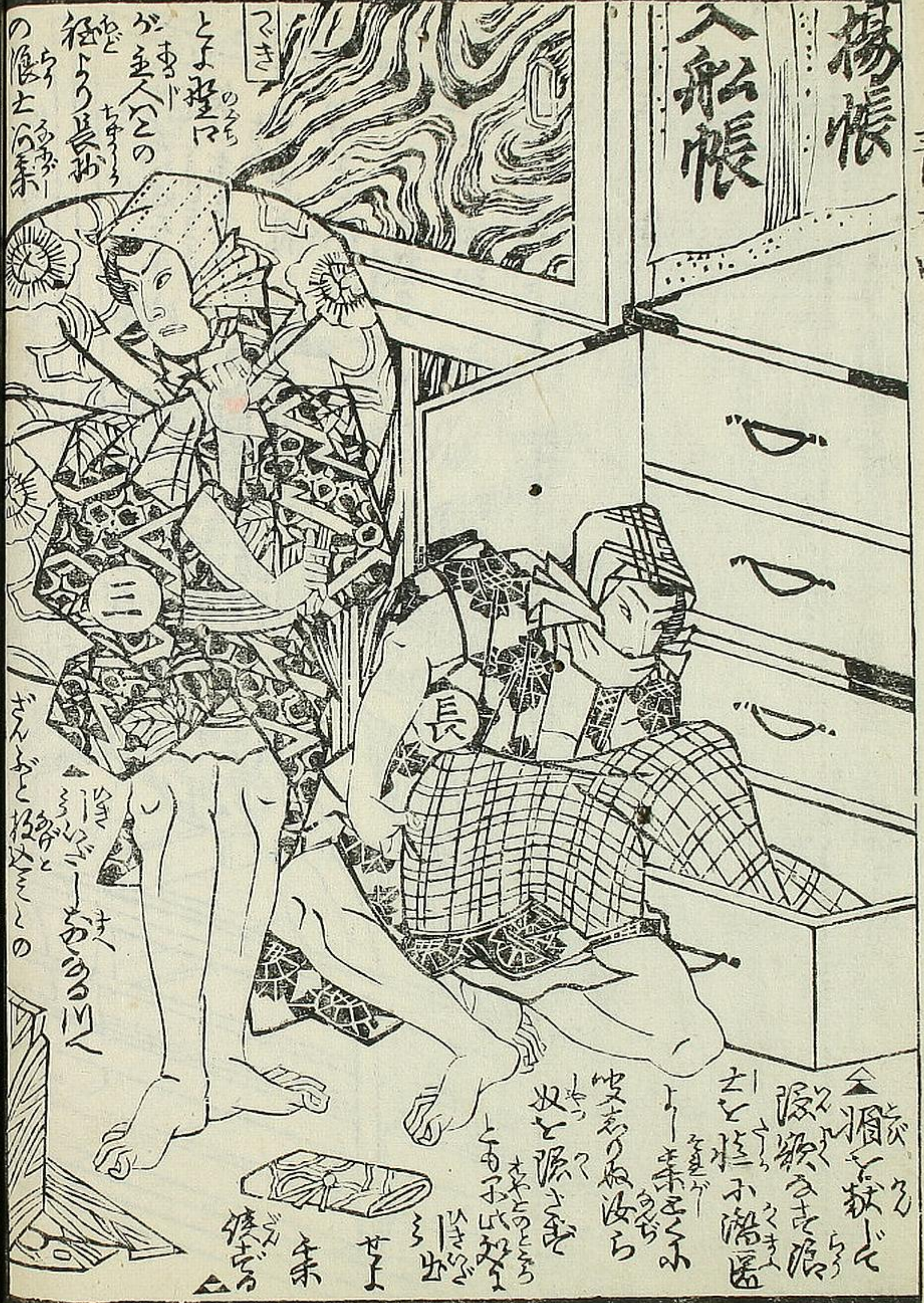
おのゝちのち
 ままの
 けの帯
 けの帯

いりて
 ままの
 けの帯
 けの帯



揚帳

入船帳



とよ聖は
が主人との
経より長
の徳とふ

板と結接
横渡妻出流して外玉
人と味ト合ひ粒多の金

勢ひや甲も瀧り込
とま木の云やうけ家の内
よ具人

全相と抜ど
隠れなき
ととほし
とよ聖は
とよ聖は
とよ聖は



とよ聖は
が主人との
経より長
の徳とふ

勢ひや甲も瀧り込
とま木の云やうけ家の内
よ具人

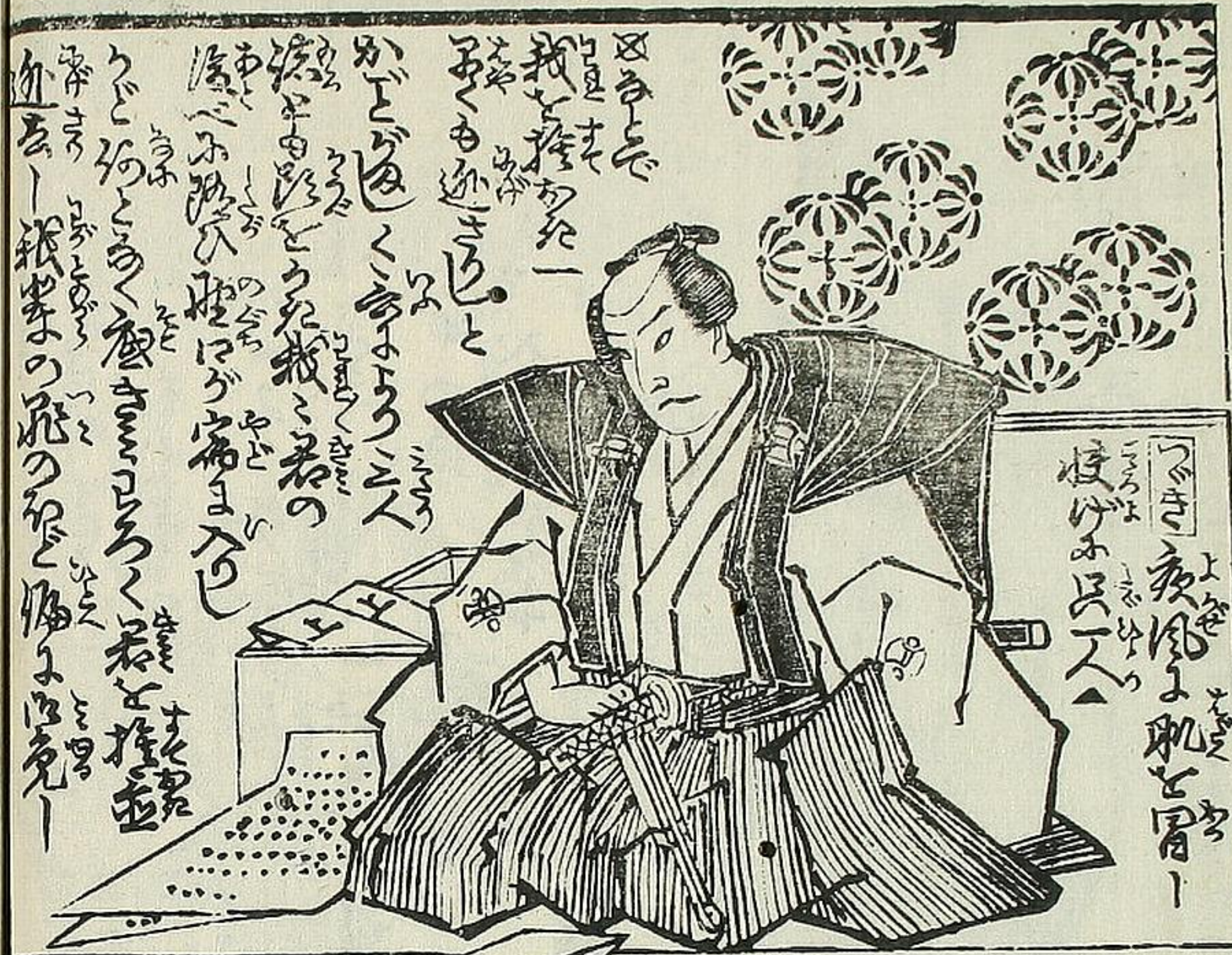
全相と抜ど
隠れなき
ととほし
とよ聖は
とよ聖は
とよ聖は



つき腕を豫ぶるあり我は祿
 とてこれんとて案内どのまはる
 むきほの案内果はと考るる一
 横をまきお考るる大いふ
 世も是ぞとかいふ
 人あは更程
 頼みて二階
 の方祿一をんこせりーとたか
 長は初とて助次年らへ名り人の
 なるを考めては世もよめる
 第より投多の名は黄金をうをひ
 けはと考るるぬりてはるる
 けはと考るるぬりてはるる

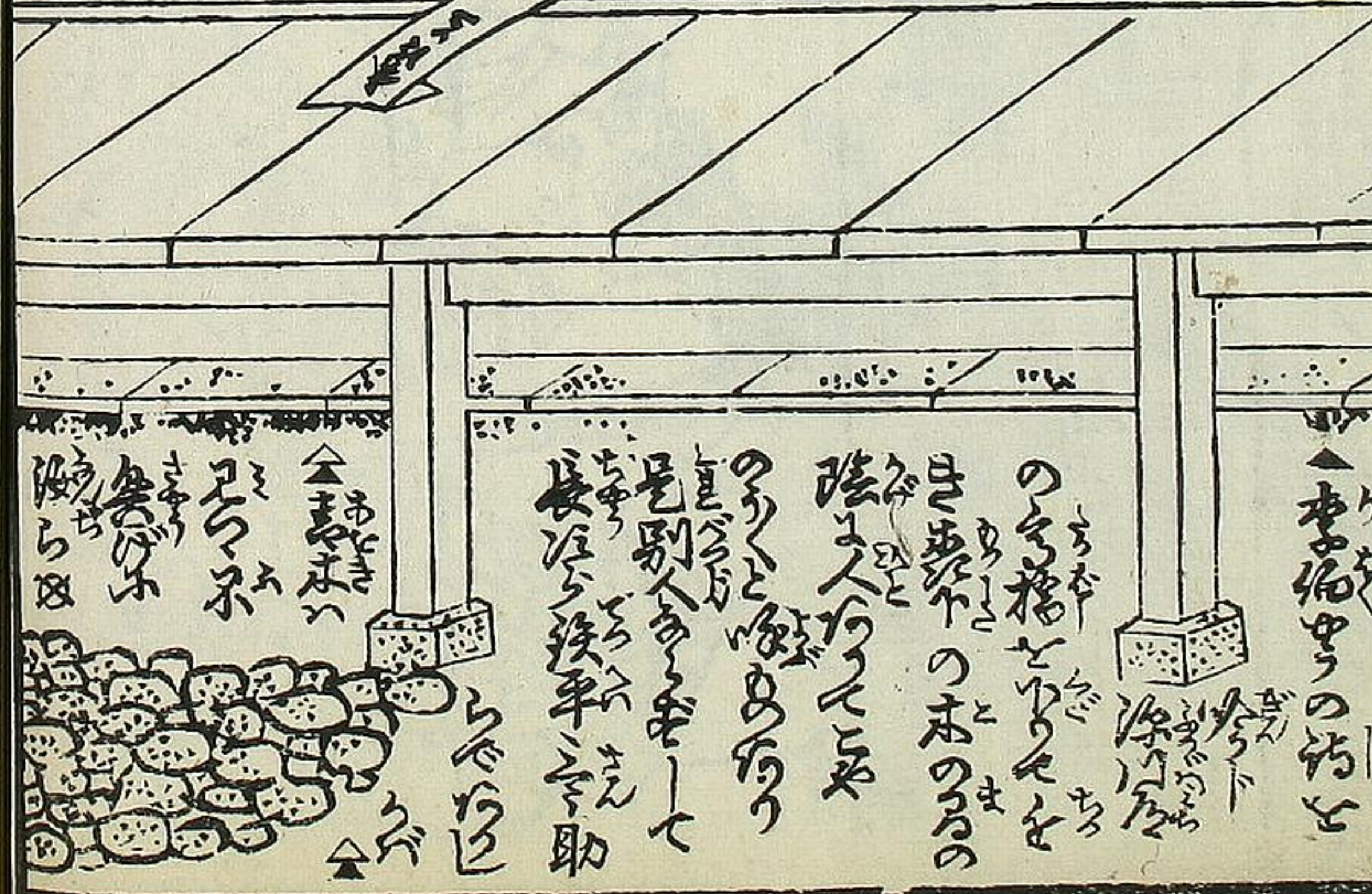


の紙
 入らち推おたま
 本と後よ
 と人の遊あうらり形と由あ
 を採たらは二階へせりお
 るあく採はるるあはは
 二階とやりのはれびと人由人
 我と考るる考るる
 らしと考るる考るる
 長
 三
 酒を夜の
 とて交
 び六
 ちう



我と持たぬ一
 手も逃さじと
 かどらぬくさつらしん
 後半由流とうた我と君の
 後へおれは世にが宿ま入じ
 うごめとめく後まきりらく君と持たぬ
 亦も一紙葉の飛のゆるしはるる

とき夜風よ肌を胃一
 使けお只一人



李倫中の物と
 のち格とりのを
 日あやの木のの
 珠よ入つてと
 のうと海のあり
 是別人多くあて
 長はて後半と君助
 らるらに

ぬきとて小舟は海に流るるも舟は海に入て皆
 りのちらむに人二月を物とて明かごとをたはよ
 きん色うまふく腐りなり是の扱もさ後め又世にが
 方よを明の物とて盗賊無び入りそとて色
 と札筋は直家内の男女大の縁なれたのそと
 と後まんとと流きたるを所よは世の書は果
 助も若よきりと茶あふら取らるるあてと
 序づかる傍よふらやの鼻紙入を元をてあり
 と板の盗賊たへの秋園をじて為せあてと
 ぬきとて小舟は海に流るるも舟は海に入て皆
 りのちらむに人二月を物とて明かごとをたはよ
 きん色うまふく腐りなり是の扱もさ後め又世にが
 方よを明の物とて盗賊無び入りそとて色
 と札筋は直家内の男女大の縁なれたのそと
 と後まんとと流きたるを所よは世の書は果
 助も若よきりと茶あふら取らるるあてと
 序づかる傍よふらやの鼻紙入を元をてあり
 と板の盗賊たへの秋園をじて為せあてと



源
 宗

つぎあまを
 さらして
 子息を
 池田播六
 之代へ
 六



▲鳴るん
 彼といひ
 是といひ
 疑ぐ
 したるは
 らと沈田の
 脚をついで

金遊笑と
 兼侍へ
 弄がる
 ころと
 あまの
 此に
 見る
 ちと

山田の

よる方
 下知
 素着
 暮本
 しく
 あら
 より
 轉一
 くら
 物
 法
 ち

廿六日

十七

青木

つぎに軍用全とせしむる為大なる義ありて全にその飛越身よりらんとせし
 情極りとも是にまじりて同子ともなすやと雖別とみらんぞこむゆき
 きをまづつゝいんを著場の妻宅に物見の巻よりちまきやとみこめ
 娘んであらん壻者一とみひる女房とて下りてはま本をさく英がこり
 涙よむせふ金まきけむらひく女房の泣きたる若とらうと分りかどち
 赤妻抱より分と投しがわひひらぬがが採捕赤よ助けし自分ハ親せふ
 左あから後が自分の巻より且再のほ家とあんと知るやとみよとあせ
 ぬ涙よりたは涙とよよとを神やねさるけついつせとよとあれたるも
 輝よまわらうと分のいほ有るまよの親父とあるとあせふのまあひいどやや
 おきこが痛くらう悪むなむらむらば初雅が傷るやとみいんを免とめ
 是と危ぶる公ののりしき涙をらう熱電の痛く痛まる血の涙流ゆ多妙
 りの裏方の八多八多の多多くやまふらうけはぬぬの涙とらうおとみ月あ
 ありの務める袖縫余所の見る目も多れり
 。み編むつぎ歩板はる染とをを希と
 御明治 本外手町 著者 羽田富次郎
 届十二月 廿日

算法并用文證書類品々

草及紙類一代記讀切本類品々

清業ちのこ
 といちのき
 はぬ人方小児
 てるおのり
 へく大病人
 ころ

事 明治太平記

村井静馬著 伏見の熱本巻五十五編
 鮮齋永濯画 十六編より鹿見島五五

○初編の伏見戦争と始りて上野東蔵山焼討と其外一
 新案の事情明細は記を居るが人情開化一目みるべし
 平かな繪入より七婦女子ふも解しめさく綴り書あり

書肆 問屋

日本橋通三丁目四番地
 延壽堂 小林鉄次郎板元

